町長ひとりごと ⑤⑥

斉藤 譲

盂蘭盆も過ぎて、いま一頻の蟬時雨は、夏の終りを告げ、爽やかな風の流れが、秋の到来を告げている。

耳を澄せれば、自然が奏でる軽快な秋の序曲が、響いてくるような気さえする。そして、田の面を金色に染めて波打つ稲穂は、今年の秋の豊かな稔りを、約束しているようだ。

▼それにしても、今年は暑い夏であった。

人々は、この暑さを避け、涼を求めて山や海へ、あるいは遠く海外へと脱出していった。その様は、まるで民族の大移動を見る思いである。これも、経済大国日本の豊かさの証明なのかもしれない。

しかし、「一億総レジャー狂」とでも表現したくなるようなこの現象は、外国からの働き過ぎ批判の反動かどうかは知らないが、観光地やレジャー施設へと、まるで追いたてられるようにして繰出しては、成金よろしく金をバラ撒くことが、恰も、ゆとりある生活の証であるかのような錯覚に陥っている一面も垣間みえたりして、日本人の心の奥行の狭さ、貧しさを証明しているような気がしてならない。

▼ところで、子供達にとって、夏休みもあと余すところ僅となった。果して、どの子供も楽しい思い出を沢山残すことができただろうか。気に懸るところである。私は、いつも今頃になると、決まって子供の頃の夏休みの悪夢を思い出す。その悪夢とは、遊び惚けて先送りした宿題に、悪戦苦闘している、幼き頃のわが姿である。

「何月何日の天気は」

「この問題は、どうやるの」

「今頃になって、何をいっているのか。あれほど毎日少しずつでも勉強しろと言ったのに、言うことを聞かないで、遊んでばかりいた罰だよ。誰ちゃんは、もう全部終ったと言っていたわ。偉いもんだ。」

「ふくろうは、明日起きたら巣をつくろう。どうでもいい、こうでもいいと鳴いている。お前は、このふくろうと同じで、今日やるべきことを明日に延ばし、明日になったらまた延ばす怠け者の生活をしてきた報いだよ。」

夏の終りに

▼突き離したような親の冷たい態度に、思わず熱い涙を、空白の「夏休み帳」の上にポタポタと落したりした。その時は、子供心にも深い後悔の念が湧き、反省したりもするのであるが、結局は、毎年同じことを繰りかえしてきた。誠にきまりの悪い話である。

自分では、何とか辻褄を合わせたつもりでも、所詮は一夜漬けの悲しさで、先生にはそれを一目で喝破され、二学期の初日は、孤影悄然としているのが常であった。

そんな私ではあったが、夏休み中目一杯遊んだ、野山や川の息づかいや、友達との絆は、小さな胸の奥にしっかりと刻まれ、四十年を過ぎた今でも、まるで昨日のことのように鮮烈に蘇ってくるのである。

▼総務庁が、今年一月に発表した「青少年白書」は、子供達の遊びの現状、変化について、次のように述べている。

現代の子供達は、放課後、友達とあまり遊ばなくなっている。友達との遊びの内容についてみると、昔は、鬼ごっこ、なわとび、野球、かくれんぼなど

①戸外で
②多人数で
③活動量の多い
④自然を素材とした
⑤それぞれが積極的に取り組む遊び

が多かったが、現代では、テレビ、まんが、テレビゲームなど

①室内において
②少人数で
③活動量の少ない
④商品化されたものを相手とする
⑤受動的な遊び

が多くなっている。

子供達は、さまざまな遊びをとおして、友達との接し方を学び、社会性を身につけていくものであり、同時に、遊びによる体験は、子供達に体力の増進と、情緒の安定をもたらし、活動性、積極的な意欲、創造力、がまん強さといったものを育くんでいくものである。しかし、このような体験が、現代の子供達には不足しているのではないかと考えられる。

▼以上が、白書の指摘するところであるが、残念ながらこのような現状が、私達の身近な子供達の中に、少なからず存在していることを、認めざるを得ない。

いま私達が、子供達に与えなければならないのは、金や物ではなく、自然を慈しみ、他人を思いやるやさしい心や、いかなる困苦にも耐え忍ぶ不屈の精神を養う徹底した教育をおいて外にはあるまい。

そんな心を、育てる種を蒔いて、夏はいま、静かに過ぎ去ろうとしている。